

史料紹介

『船大工町中由緒書』

——伊豫宇和島伊達氏領の船大工関係史料——

渡 邊 忠 司

はじめに

紹介する『船大工町中由緒書』（以下『町中由緒書』）は、伊豫伊達氏領宇和島城下町の職人町船大工町居住の船大工ほか職人の由緒書である。船大工町は近世城下町町屋地域を構成する職人町で、伊達氏領の場合、領主の御座船・御用船・御手船等の新造・造替・修復に携わった御用船大工の居住地であった。管見のかぎり、宇和島城下町の研究では町屋地域形成過程の研究は多くない。この史料はその一助となる古記録である^①。

史料は船大工の系譜、分家・別宅四一家分を記載し、嘉永七年（安政元年、一八五四）閏七月に船大工町丁頭紀伊国屋長兵衛・市原屋新兵衛および船大工権兵衛によってまとめられ、

同年八月に伊達氏頭取渡邊作之進に提出された^②。

本史料は、すでに『伊豫史談』に一部を紹介し、また本史料によって近世大名のもとにあった船大工らの役割について別稿「近世宇和島伊達氏領における船大工の展開」（仮題）を予定している^③。

以上を参照しつつ、本史料の持つ特色や伊達氏宇和島城下町の職人町と船大工の由緒書の意義について、概略を述べておく。

一 『船大工町中由緒書』の概要

頭取渡邊氏に提出当初の『町中由緒書』の記事は元和元年（一六一五）年の伊達秀宗入部から嘉永七年までであった。明治八年（一八七五）に至る記事もあるが、これは作成後に頭取

渡邊氏が船大工それぞれの賞詞・代替りや借家分の出入り等の書き足しを求めていることによる。

史料の特色は、一つは宇和島領内(以下領内)の船大工町の起点となった者の出身地が紀伊国加太浦(和歌山市)と土佐国高知(高知市)であること、二つは領内に加え伊豫吉田伊達氏領の船大工が基本的には紀伊船大工の弟子の独立と展開であること、三つは移住時期が元和年間で秀宗入部に伴う城下町の整備と関連していること、などが確認されることである。

このほか船大工町の町政機構の一端も窺える。それぞれの船大工の履歴に、大工職の相続、船造営・修復など具体的な職務とともに町方の役職実績も記され、丁頭、丁頭順役、火消小頭等々の町役名を確認できる。町役の従事期間も記され、これら町役を中心に町内秩序維持などの実務が執行され、それらが世襲に近いかたちで受け継がれていたことを読み取ることができる。

また町方の防火・消火には、多くの城下町では火消に家大工が動員されていた。たとえば大坂三郷では市中に二三組の大工組があり、それぞれが市中を雨・波・滝・川・井に区分けされた担当地域に組分けをされ、消防・消火に当たっていた。^⑤

由緒書には、船大工が火消小頭に就いている記事があり、

宇和島城下では船大工も動員されていたと見られる。宇和島城下・領内家大工の状況が不明なので、動員の状況は明確ではないが、船大工が同様の役割を負わされていたことを窺うことができる。

二 伊達氏宇和島城下町と町人町について

伊豫宇和島は、伊達秀宗の入部によって城下町が完成されたが、その基点は戦国期西園寺氏の在地支配にある。西園寺氏は在地領主であった一五将を統率し、在地領主層の惣領主的位置にあったが、この関係は土佐長宗我部氏の伊豫侵攻・制圧で解体され、同時に伊豫宇和郡地域の在地領主制も解体された。^⑥

その後、天正十三年(一五八五)の豊臣秀吉の四国制圧と小早川隆景の伊豫一国配置があり、継いで同十五年に戸田勝隆、文禄四年(二五九四)に藤堂高虎が配置されている。その領有のもとで、宇和島地域は板島城から丸串城を中心にした城下町の整備が進んでいた。本格的な整備は藤堂氏による宇和島城と城下町の建設によってほぼ近世城下町の形態が出来上がっている。

伊達氏は元和元年に入部して以後、藤堂氏らの城郭と城下町を基盤に、慶安年中(一六四八―一六五二)には武家屋敷町

一五町、町人町六町、下士などの侍、下層武士らと商人・職人・百姓らの混雑地一一町で構成される町数三二町の城下町を造り上げた。⁷⁾

伊達氏の城下町整備は、埋め立てと新田による百姓町恵美須町と職人町船大工町の成立によつて完結する。それが船大工町の由緒書で確認される。『町中由緒書』の船大工由緒書には、最初の居住者が元和年中に紀伊加太浦から、寛永元年(一六二四)に土佐南高知から移住したことを記している。参考までに『町中由緒書』の関連部分を示しておく(後掲史料参照)。

由緒書

一私先祖玉置庄左衛門生国紀州賀太浦^(加太)元和年中浄満寺開山伴仕

御当国江罷越、浄満寺檀家ニ御座候而御丁内江代

々住居仕候、

右先祖庄左衛門儀嫡子甚九郎江相続御願申上

元和九癸亥二男庄左衛門召連、当時船大工権兵衛

向本宅江引移申候、

賀太浦(加太浦)から移住した玉置氏は領内に浄土真宗の布教のために、汲鷲に招聘された浄満寺開山の伴として移住している。玉置氏はこの後に紀伊国屋の屋号で船大工棟梁、御

用船大工として、徳川政権期から明治期にかけて船大工町の祖となり、領内に展開した船大工の祖となった。以後、明治期まで九代継続している。

もう一人が市原屋の祖で、土佐出身の浪人市原甚弥太である。由緒書の冒頭部分をあげておく(後掲史料参照)。

由緒書

一私先祖土州南高智之産ニ而浪人仕、

寛永元甲子年

御当国江罷越御丁内江住居仕、妙典寺檀家ニ罷成、

俗名市原甚弥太与申候、

寛永二拾癸未年死去仕候、

市原氏は島原の一揆には、二代目甚右衛門が伊達氏家臣権田権兵衛の供として従軍し、御水主に取り立てられ家臣となつている。このため二男八左衛門が三代目として御用染物を扱う紺屋職方となった。以後明治期まで七代を数える。

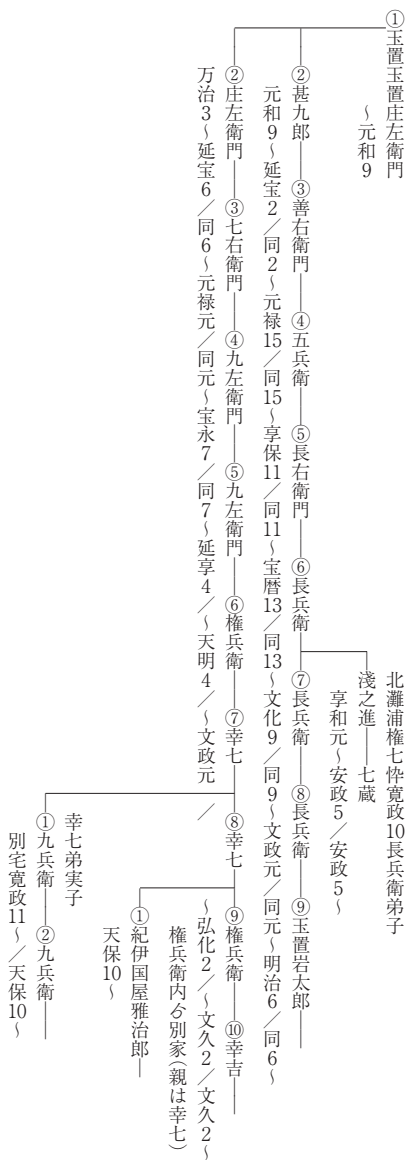
ここに見られるように、領内船大工町の祖はこの二人であり、その移住記事から船大工町の成立が元和・寛永期にあつたといえよう。この事実は、船大工町の成立が慶安年中とする見解の再検証を促す。⁷⁾

特に紀伊国屋は船大工の祖であり、領内船大工の展開の起点であつた。この後の船大工町と船大工の展開を見ると、紀

大工系譜

船大工の系譜(嘉永7年まで)

図1 紀伊国屋長兵衛(嘉永7年)系譜



伊国屋の分家、弟子入とその独立・別宅、しかも浦方からの弟子入から独立・別宅という船大工の増加が確かめられる。

参考までに、由緒書から作成した紀伊国屋の系譜をあげておく(図1)。

『町中由緒書』の船大工由緒書には、船大工が伊達氏の諸船の造作に当たった記録も豊富である。船大工の態勢が整ったと見られる元禄期以降、特に宝暦元年(二七五二)の鯛船造

立以後、安政四年(一八五七)まで一四艘が造作・造り替え、修復されている。

安永五年(一七七六)以降では、緑丸・金毘羅丸・和霊丸・明神丸・飛燕丸・天龍丸六艘がほぼ一八年の間に造り替えられている。この六艘が伊達氏保有の艘数であるが、船大工が御座船・荷物廻船、御用船・御手船など領主御用船の維持に関わっていた事例とその造立態勢を確認できる記事である。

特に弘化元年（一八四六）から二年、嘉永三年（一八五〇）に造立・造り替えられた天龍丸の事例は船大工町の船大工が棟梁を務め、新造された貴重な記録である。

これについては、「藍山公記」（巻二）の弘化元年九月七日の条に記録が残る。弘化元年の造立は領内物産と専売制のために江戸大廻り大船天龍丸の新造であり、伊達氏領では初めての千石積の大廻り廻船の造立であった。造作過程の記事では、帆柱木の搬出に手間取り、伐採地を変更して川流し・海路の搬出から陸路での搬出へ変更した興味深い経緯が記されている。製造功賞を記した箇所には「頭取光本太郎兵衛渡辺作之進ニ金百五十疋宛ヲ与え」とある。⁸⁾

『町中由緒書』の記事によると、弘化二年の天龍丸は「船体成就」後に松山で払い下げとなり、改めて嘉永三年に造り替えられたようにみえる。記録からは天龍丸が千石積の廻船として新造され、大廻り廻船として運用されたかは不明である。「藍山公記」（巻一）と『町中由緒書』の天龍丸造立の記事には不整合がある。今後の検証が必要であろう。

おわりに

近世城下町は、豊臣政権の大坂城下町造営方式が城下町造営の基本形として諸大名に引き継がれたが、その研究は深化

されたとは言い難い。出羽秋田や丹波亀山（亀岡市）等では城下町造成時に周辺村落を取り込み、侍と町人・百姓の混在する町があり、身分と居住区分の不十分さが残った。⁹⁾

宇和島城下も同様の事態があった。武家屋敷町、混在町、町人町の区分はあったが、混在町は武家と町人の混在であった。船大工町は町人町（職人町）の一つであり、享保八年（一七二三）十一月七日の記録では居住者は小頭四人、船大工七人、町人一人の計十二人であった。¹⁰⁾

船大工町の居住者は屋敷持居住町人で、公役と町役・夫役を負担する階層である。混在地の存在は宇和島城下町が身分による居住区分の不十分さがあり、それが未完の城下町を示すのか、それとも城下町の在り方なのか、検証すべき課題のひとつであろう。紹介史料はその一助となるであろう。

註

- (1) 宇和島伊達氏領・吉田伊達氏領については、三好昌文氏らの研究業績によるところが大きい。但し三好氏も指摘するように、町人町に関する「全体的な史料は見当たらない」。宇和島・吉田旧記刊行会編『宇和島藩町方・殖産興業・軍事改革史料―藍山公記―「龍山公記」』（宇和島・吉田旧記 第二十五輯、平成十八年の「例言」参照）。
- (2) 『船大工町中由緒書』参照。

(3) 「『船大工町中由緒書』(抜粋)―宇和島城下船大工由緒書―」(『伊豫史談』三九八号、令和二年七月号、伊予史談会)、別稿については今のところ研究ノートとして予定。なお別稿については掲載未定。

(4) 初代伊達秀宗は明暦三年(一六五七)に末子宗純に三万石を分地し、吉田伊達氏が成立した。

(5) 『大阪市史』第二卷(一九二二)、『新修大阪市史』第四卷(平成二年参照)。いずれも大阪市。

(6) 三好昌文「宇和島城下町の形成について」(『愛媛近代史研究』三四号)参照。元和元年(一六一五)には商人町・職人町が存在していたとする。

(7) 前掲、宇和島・吉田旧記 第二十五輯参照。

(8) 宇和島・吉田旧記刊行会編『宇和島藩町方・殖産興業・軍事改革史料―藍山公記』・「龍山公記」(宇和島・吉田旧記第二十五輯、平成十八年)、五四頁。

(9) 『秋田県史』(通史近世篇上巻)、金山真樹「近世初期丹波亀山城下町形成期における『村』」渡邊忠司監修「近世地域史文化史の研究」名著出版、二〇一八。

(10) 「杵崎須賀新町屋鋪余地畝数并御年貢帳」(近代史文庫宇和島研究会『宇和島藩庁・伊達家史料』7)。

〔史料翻刻〕 〔船大工町中由緒書〕 〔凡例〕

一 本稿は伊豫宇和島伊達氏領城下町の職人町船大工町居住船大工の由緒書である。内容は町そのものの由緒ではなく町中船大工の由緒・系譜記録である。

二 翻刻にあたって、基本的には原文の体裁に従ったが、読

解の便宜を考慮して適宜読点を入れた。その表示は該当箇所については次の通りである。

(一) 平出・台頭・欠字は原文に従った。

(二) 虫損は「ムシ」と表記し、破損は「」で表し、字数が推測できる場合は□□で示した。また判読不明の場合も同様に□□で表示した。

(三) 原文の書き直し・訂正・抹消文には「ミセケチ」を付した。

(四) 貼紙・付箋・付紙等は、(貼紙)・(付箋)・(付紙)と肩書した。

三 翻刻は基本的に常用漢字を用いたが、固有名詞や地名などは原文のままに表記した。但し、異字・俗字・合字・かな、また助詞としての使用については原文のままだに残した部分もある。

者(は) 而(て) 与(と) 并(並) 分(より)

江(え) 茂(も) 躰(体) 帋(紙) 亘(事)

四 翻刻・校訂者による注記は、次のように表示した。

(一) 挿入・書き直し・書き加えなどは、できる限り原文体裁の通りに表示

(二) 誤字・脱字・当て字なども原文に従ったが、判明する限りで右側に注記するか、(ママ)と表記

五 『船大工町中由緒書』は古書店からの購入による。大判和装綴丁数一〇二丁(竪二七・七_{ナセ}×一八・八_{ナセ})の冊子で、付箋・挿入紙も若干あるが、これらは翻刻の際に注記した。キーワード…宇和島城下町 伊達氏 船大工 職人町

史料 『船大工町中由緒書』

(表紙中扉)

船大工町中由緒書

由緒書

一 私先祖玉置庄左衛門生国紀州賀太浦^(加太)の元和年中浄満寺開山伴仕
御当国江罷越、浄満寺檀家ニ御座候而御丁内江代々住居仕候、
右先祖庄左衛門儀嫡子甚九郎江相続御願申上
元和九癸亥二男庄左衛門召連、当時船大工権兵衛向本宅江
引移申候、

一二代目 嫡子船大工甚九郎

『船大工町中由緒書』

元和九癸亥年相続仕候、

同年の延宝二甲寅年迄五十ヶ年相勤申候、

一三代目 甚九郎俣 善右衛門

延宝二甲寅年相続仕候、

元禄拾五壬午年俣又兵衛江相続相願隠居仕候、

延宝二甲寅年の元禄拾五壬午年迄式拾九ヶ年相勤申候、

一四代目 五兵衛

元禄拾五壬午年相続仕候、

元禄拾五壬午年の享保拾壹丙午年迄式拾五ヶ年相勤、

俣長右衛門江相続相願隠居仕候、

一五代目 長右衛門

享保拾壹丙午年相続仕候、

同拾三戌申年の丁頭役被 仰付候、

享保拾壹丙午年の宝暦拾三癸未年迄三拾九ヶ年相勤、

俣長兵衛江相続相願隠居仕候、

一六代目 長兵衛

宝暦十三癸未年相続仕候、

安永二癸巳年御願申上、南側濱屋敷江普請仕引移申候、

同三甲午年の丁頭役被 仰付候、

同五丙申年御手船緑丸御造替御用被 仰付相勤候二付

御目録被下置候、

安永三甲午年分享和元辛酉年迄丁頭役二十八ヶ年相勤

退役仕候、其節御目録被下置候、

文化二乙丑年二男長右衛門扣家江別宅為仕、本人相立

申候、

同九壬申年悴長兵衛江相続相願申上候、

宝曆十三癸未年分文化九壬申年迄四拾九ヶ年相勤申候、

一七代目

長兵衛

文化九壬申年相続仕候、

文化九壬申年分

文政元戊寅年迄七ヶ年相勤、悴長兵衛江相続為仕候、

一私儀

文政元戊寅年相続仕候、

同七甲申年御手船明神丸御造作御用被 仰付相勤候二

付、御目録被下置候、

同十三己亥年火消小頭役被仰付候、

天保十三壬寅年 御賞書頂戴仕、平日心得向宜敷相勤

一段之事ニ依而丁頭役被 仰付候、同年分丁頭役三人

ニ罷成候、

嘉永元戊申年御手船両艘御造作御用被 仰付相勤候二

付、御目録被下置候、

同二己酉年 御座船下入替御造作之節相勤候二付、御

目録被下置候、

同年御手船金毘羅丸長濱ニ而御造作之節相勤候二付、

御目録被下置候、

同年御手船天龍丸松山方江御払之節、御用相勤候二付、

御目録被下置候、

同三庚戌年御手船天龍丸御造替御用被仰付、相勤候二

付、御目録金老両被下置候、

同四辛亥年御手船金毘羅丸上廻り御造作御用被 仰付

相勤候二付、御目録被下置候、

同六癸丑年丁頭役年数貞実ニ相勤候二付、家名書下シ

御免被成下候

文政元戊寅年分

嘉永七甲寅年迄三十七ヶ年相勤申候、

当寅四十九歳ニ罷成申候、

右之通御座候、以上

嘉永七甲寅閏七月

船大工

紀伊国屋長兵衛

安政四年御手船飛造丸御造替御用被 仰付候、

同七庚申年三月廿七日丁頭役年数出精相勤候ヲ以名字

御免被成下事、

慶応二丙寅年丁頭役年数出精相勤、丁用懸届且亦窮民
為救銀札壹貫目致出銀候趣ヲ以格別之御吟味合

御目見被仰付候支、

十二月廿二日

同三年五月御時體柄恐察仕、銀札三貫目献金仕候間、
引籠御紋付横鹿御上下拝領仕候、

明治六西閏六月廿二日四ツ時死去仕候、

行年六拾八才也

一九代目

玉置岩太郎

明治六年閏六月相統仕、

一明治八年閏六月神風講世話懸り御用相勤申候、

一々年七月議事役被 仰付候、

一々年八月町用懸り被 仰付候、

由緒書

一私先祖土州南高智之産ニ而浪人仕、

寛永元甲子年

御当国江罷越御丁内江住居仕、妙典寺檀家ニ罷成、俗

名市原甚弥太与申候、

寛永二拾癸未年死去仕候、

一二代目

甚弥太倅

甚右衛門

寛永十五戌寅年天草一揆相發り候節、拾七歳ニ而梶田
権兵衛様御供仕敵陣ニ而鉄炮之流レ矢二的り、其玉鉢
中ニ留り老年ニ及相候迄去り不申由申伝候、

宝永弍乙酉年八十四歳ニ而死去仕候、

右甚右衛門倅仁左衛門与申者

御殿ニ而角力

御覽之節、巧者之者ニ御座候ニ付被

召出、御船手御水主被

仰付候ニ付、二男八左衛門江相統御願申上候、

一三代目

八左衛門

宝永弍乙酉年相統仕、紺屋職方ニ付而御船御用御幕其
外御染物御用向相勤申候、但御船手市原氏元祖仁左衛
門弟八左衛門六十六歳ニ而延享元甲子年死去仕候、

八左衛門倅

甚四郎

一四代目

延享元甲子年相統仕、

同弍乙丑年死去仕候、

甚四郎倅

新兵衛

一五代目

延享弍乙丑年相統仕、右之者生得諸小細工或者画道坏

ニ志シ深く、何事ニよらず兼而巧者之者之由ニ被為及
御聞御用ニ而

御殿御庭ニ被

召 御用イ之御硯ニ彫物御座候ヲ、何類坎与御尋被下
置候ニ付拝見仕、右者龍頭魚^{シヤチホコ}ニ而可有御座与申上候、
但御硯ニ龍頭魚彫候訳合存知候坎与御尋被成下候ニ付、
尤右龍頭魚与申者者

御殿子御棟杯ニ水ニ縁有ル物ニ御座候故、昔より御火
難除ケニ御用被遊候由聞伝罷在候与申上候処、至極巧
者之者与被 仰下、并右御硯之岡ニ彫物有之候物者何
レ与申物坎与、又々御尋被成下候ニ付、右者海馬与申者
ニ而御座候与申上、旁巧者之者与被 仰下、且亦

御庭ニ人麿様之御手水鉢ニ龍頭魚之下タ絵ヲ画シ候様
被 仰付候ニ付奉畏、則チ下タ絵相画キ候ニ付惠美須
町石屋弥兵衛江彫刻仕候様被 仰付候、只今之石職中
村弥兵衛祖父ニ相当り候者ニ御座候、其節新兵衛江
御目録被下置候、
延享貳乙丑年

寛政貳庚戌年迄四十五ヶ年相勤、忤新兵衛江相続御願
申上、同年ニ死去仕候、

一六代目

新兵衛

寛政貳庚戌年相続仕候、惣而暫中絶仕罷在候処、御船
御用御染物御用聞被 仰付、

享和元^{辛酉}年丁頭役被 仰付、

文政七甲申年御賞被成家名書下シ御免被 仰付、

天保元^{庚寅}年迄貳拾八ヶ年相勤退役仕、其節 御目録
俵子被下置候、

天保八丁酉年隠居仕、三助与改名仕、実子新兵衛江相
続御願申上候、

天保貳^{辛卯}年船大工芳右衛門家屋敷相求、二男八左衛
門江相譲り別宅為仕候、

嘉永元戊申年三月朔日八十三才ニ罷成候ニ付御祝被成
下

御殿御内庭江罷出

御目見被 仰付、御酒頂戴被 仰付候、

同三庚戌年二月五日八十五才ニ而右同断

御殿御庭江罷出

御目見被 仰付、御酒頂戴被 仰付候、

同五壬子年閏二月廿七日八十七才ニ而

御奉行様御役宅江罷出

御目見被 仰付、青銅五百文被下置頂戴仕候、

御屋形様御帰城被 遊候御跡ニ而御奉行様御座敷ニ而

御逢被成下置、御酒御肴御吸物御膳部被 仰付、
御目通^二而頂戴仕候、惣而

嘉永五壬子八月八日八十七才^二而死去仕候、

一私儀

天保八丁酉年相続仕、

同九戊戌年火消小頭役被 仰付、

同拾壹庚子年丁頭順席被 仰付、

弘化三丙午年丁頭役被 仰付候、

当寅年^十迄九ヶ年相勤、当寅五十九歳^二罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅年閏七月

市原屋

新兵衛

一安政二乙卯年三月廿一日、近来足病難儀^二而丁頭役難相勤候間、御役方御免被成下度旨願出候处、願之通御免被成下、是迄貞実相勤候趣ヲ以御目録銀札式両被下置候、

一天保八酉年^今安政二乙卯年迄二十年相勤候处、病氣罷在、八月廿三日悴定治へ跡相続願出致死去候、当卯六十歳迄相勤候、

市原屋

定 治

私儀父新兵衛及末期願上候通跡相続、安政二卯年八月晦日被 仰付候、

安政六未年貞実相勤候二付、火消小頭格被申付候、

文久二壬戌年右先祖已来代々実子致相続家筋之者^二候趣、且平日心得方も宜、去愁患病流行之節養理合相弁对病家実意之養も有之趣相聞、志奇特之事^二而、依之格別之御吟味合にて町頭格申付候、

元治二乙丑年、右年数貞実相勤家筋之者^二付、丁頭本役申付候、相役申合念人可相勤候、

由緒書

一私先祖玉置庄左衛門、生国紀州賀田浦^{（前本）}元和中淨満寺開山同伴仕

御当国江罷越、淨満寺檀家^二御座候而御丁内江代々住居仕候、

右先祖庄左衛門二男庄左衛門召連、

元和九癸亥年私方江引移申候、

万治三庚子年庄左衛門江相続御願申上、死去仕候、

一二代目

松大工

庄左衛門

万治三庚子年相続仕候、

延宝六戊午年倅七右衛門江相続御願申上隠居仕候、

万治三庚子年分延宝六戊午年迄十九ヶ年相勤申候、

一三代目

七右衛門

延宝六戊午年相続仕候、

元禄元戊辰年迄拾壹ヶ年相勤申候、

一四代目

九左衛門

元禄元戊辰年相続仕候、

同年丁頭役被 仰付候、

宝永七庚寅年迄貳拾三ヶ年相勤申候

一五代目

九左衛門

宝永七庚寅年相続仕候、

正徳元辛卯年丁頭役被 仰付候、

延享四丁卯年迄三拾八ヶ年相勤申候、

一六代目

権兵衛

延享四丁卯年相続仕候、

宝暦元辛未年丁頭役被 仰付候、

同宝暦年中御鰯船御造立御用被 仰付相勤候二付、御

目録被下置候、

安永三甲午年老年二罷成候二付、依願御役方御免被成

下、御目録被下置候、

天明四甲辰年御手舩緑丸御造替御用被 仰付候、老年

二罷成名元九助与改名仕候、

天明四甲辰年迄三拾八ヶ年相勤申候、

一七代目

幸七

天明四甲辰年相続仕候、

寛政元己酉年丁頭役被 仰付候、

同十一己未年弟実子九兵衛儀扣家江別宅為仕、本人二

相立申候、

文化元甲子年御手舩金毘羅丸御造替、

文政元戊寅年迄三十五ヶ年相勤申候、

一八代目

幸七

文政元戊寅年相続仕候、

同式己卯年火消小頭役被 仰付候、此年分右之役方初

而被 仰付候、

同三庚辰年御手舩金毘羅丸御造作御用被 仰付相勤申

候二付、御目録被下置候、

同七甲申年御手舩明神丸御造作御用被 仰付相勤申候

二付、御目録被下置候、

天保元戊寅年丁頭役被 仰付候、

同七丙申年御手舩飛燕丸御造替御用被 仰付相勤候二

付、御目録被下置候、

同八丁酉年非常之時節柄二付成上ヶ仕候二付為 御賞

木綿沓端被下置候、

同拾己亥年御手舩金毘羅丸御造替御用被 仰付相勤候
二付、御目録被下置候、

御大工喜多之丞殿業方修行世話仕候二付、御目録俵子
沓俵被下置候、

天保十己亥年丁頭役年数出精相勤候趣ヲ以家名書下シ
御免被成下候、

同十四癸卯年二男雅次郎儀扣家江別宅為仕、本人二相
立申候、

弘化元甲辰年御手舩天龍丸御造立御用被 仰付相勤候
二付、御目録被下置候、

同二乙巳年老年二罷成候二付御願申上、丁頭役御免被
成下候、其節御目録被下置候、

文政元戊寅年分弘化二乙巳年迄式拾八ヶ年相勤申候、
一私儀

弘化二乙巳年相続仕候、其節火消小頭役被 仰付候、
同三丙午年足病二付御願申上、火消小頭役御免被成下

候、其節丁頭順席被 仰付候、
嘉永元戊申年御手舩飛燕丸・金毘羅丸上廻り下包二御

造作被 仰付候節、
御目録被下置候、

同三庚戌年御舩手出火之節御目録被下置候、

同年丁頭役被 仰付候、
同年御手舩天龍丸御造替御用被 仰付相勤候二付、御

目録金沓被下置候、
同四辛亥年御手舩金毘羅丸上廻り御造作御用被 仰付

候節、御目録被下置候、
同六癸丑年平日心得方宜敷、別而役方存人厚実意二世

話行届、格別一同之為筋二茂相成、其上家業をも相勤
候趣相聞一段之事二候、依之木綿沓端御目録之通被下

置候、
弘化二乙巳年分当寅迄拾ヶ年相勤、当寅四拾五歳二罷

成申候、
右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 舩大工
權兵衛

安政四巳年旧家ニ而代々丁頭役全相勤候二付、家名書
下し御免被成下候、

同年御手舩飛燕丸御造替御用被 仰付候、
安政七庚申年御奉願上、江戸御屋敷御普請二付差上銀

致候也、三月廿七日御酒被下置候、
文久四子年丁頭役年数出精相勤候趣相聞候ニ而、為御

褒美苗字被成御免候、

弘化二乙巳年今元治二乙丑年迄貳拾壹ヶ年相勤申候処、
病氣相在、三月十二日倅幸吉乞跡相続願置致死去候、
当丑五拾六才迄相勤申候、

船大工

幸 吉

私儀文久二乙丑三月廿日父権兵衛及末期願上候通跡相
続、火消小頭役被 仰付候、

慶応二丙寅年十二月廿二日貞実相勤候所、窮民為救銀
札壹貫五百目致出銀候趣二付、格別之以御吟味合丁頭
格被仰付候迄、

同三卯年五月御時體柄恐察仕、銀札四貫目献金仕候間、
苗字御免被成下候事、

由緒書

一私儀

天保十四癸卯年船大工権兵衛内今別宅仕候、其節親幸
七ヶ譲り受御船手御買入 御用聴被 仰付、当年迄拾
貳ヶ年相勤罷在候、
嘉永元戊申年火消小頭役被 仰付候、
同六癸丑年平日心得方宜敷丁内一同之世話行届候趣ヲ

以丁頭格被 仰付候、

天保十四癸卯年今

嘉永七甲寅年迄拾貳ヶ年相勤、当寅三十九歳ニ罷成申
候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 紀伊国屋

雅治郎

安政二乙卯年五月十一日貞実相勤候趣ヲ以丁頭役被
仰付候、

同年十月廿二日去冬災變二付丁中格別致難洪候者へ為
救致出米、其上平日丁用等実意ニ世話行届候ヲ以御酒
被下置候、

同四丁巳年十一月十一日丁内世話行届、且又為船御手
海縁丸引受致世話候、取計向実意ニ行届候趣ヲ以家名
被書下シ御免被成下候、

安政七庚申年御所務上江戸御屋敷宜可被仰下候付差上
銀致候付御酒被下候、

元治二乙丑三月御国恩為冥加金銀札差上、志奇特候事
ニ而苗字御免被成下候、格別候故御吟味合を以
御目見被仰付候、

〔貼紙〕

「慶応二丙寅十二月廿二日年数丁頭役出精相勤、

丁用努届且亦度々窮民相救、当秋銀札拾貫目

致出銀困窮者相救候二付、格別之以御吟味合ヲ

御紋付御上下拝領并五品衣服御免被仰付候夏」

〔貼紙〕

「慶応三丁卯□月父雅治郎承是迄度々致米上銀等、

去冬丁内困窮者為救多分之致出銀、志奇特之趣ヲ

以俸徳太郎江町頭格被仰付候事、

同年五月御時體柄恐察仕銀札四貫目承置仕候間、俸徳

太郎江苗字御免被仰下候事、

」

由緒書

一 私儀

天保二辛卯年市原屋新兵衛内分別宅仕候、

弘化三丙午年火消小頭役筆頭被 仰付候、

嘉永元戊申年火消小頭筆頭役

御免被 仰付候、

同二己酉年火消小頭婦役被 仰付候、

天保二辛卯年今当

嘉永七甲寅年迄二十四ヶ年相勤、当寅五十四歳二罷成

申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 市原屋

理兵衛

安政四巳年火消小頭年数出精相勤候趣二付、丁頭格二

被成下、火消小頭御免、

元治二乙丑年右年数貞実相勤候三而丁頭順席申附候、

由緒書

一 私先祖油屋太郎兵衛

寛文年中御町今当御丁内江引越居住仕候、

宝永元甲申年迄相勤仕候、

一二代目

庄兵衛

宝永元甲申年相続仕候、

寛延三庚午年迄四拾七ヶ年相勤申候、

一三代目

権六 船大工九左衛門二男

寛延三庚午年相続仕候、

安永元壬辰年丁頭役被 仰付候、

同二癸巳年南側濱手屋敷江引移申候、

天明七丁未年丁頭役相勤候二付御目録被下置候、

寛政三辛亥年迄四十二ヶ年相勤申候、

一四代目

権六

寛政三辛亥年相続仕候、

文化九壬申年御手船和靈丸御造替御用被 仰付相勤候二

付、御目録被下置候、

文政二己卯年火消小頭役被 仰付候、此年〆右之役方

初而被 仰付候、

同三庚辰年御手船金毘羅丸御造作御用被 仰付相勤候

二付、御目録被下置候、

文政六癸未年丁頭役被 仰付候、

同七甲申年御手船明神丸御造作御用被仰付相勤候二付、

御目録被下置候、

天保七丙申年御手船飛燕丸御造替御用被 仰付相勤候

二付、御目録被下置候、

同八丁酉年非常之時節柄二付成上ケ仕候間、為御賞木

綿耆端被下置候、

同拾乙亥年御手船金毘羅丸御造替御用相勤申候二付、

御目録被 下置候、

同十三壬寅年家名書下シ 御免被成下候、

弘化元甲辰年御手船天龍丸御造立御用相勤申候二付、

御目録被 下置候、

同四丁未年養子権六江相統御願申上候、

其節丁頭役二十五ヶ年相勤退役御願申上候二付、御目録被下置候、

寛政三辛亥年〆

弘化四丁未年迄五十七ヶ年相勤、名元庄兵衛与改名仕

候、

一五代目

権六 船大工幸七二男

弘化二己巳年火消小頭役被 仰付候、

同四丁未年相統仕候、

嘉永二己酉年丁頭役被 仰付候、

同三庚戌年迄四ヶ年相勤申候、

一私儀

四代目権六倅

嘉永三庚戌年相統仕候、

同年御手船天龍丸御造替御用相勤申候二付、御目録被

下置候、

同四辛亥年火消小頭順席被 仰付候、

嘉永三庚戌年〆当寅年迄五ヶ年相勤、当寅二十七歳二

罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 船大工

権 六

安政二乙卯年五月十一日貞実相勤候ヲ以火消小頭本役被 仰付候、

同四年御手船飛燕丸御造替御用被 仰付候、

同六未年貞実相勤候付丁頭格被申付候、
同七庚申年差上銀致候付、御酒被下候、

嘉永七甲寅閏七月 船大工

九兵衛

由緒書

一私父船大工九兵衛儀、船大工権兵衛先祖

玉置庄左衛門

六代目九助倅

寛政十一己未年控家江別宅仕候、

同年丁頭助役被 仰付候、

文化五戊辰年丁頭役被 仰付候、

文政六庚未年迄十六ヶ年相勤、老年二罷成候二付、退役

御願申上候処、願之通

御免被成下、年数全相勤候趣ヲ以御目録銀壹枚被下置候、

天保十己亥年迄四十壹ヶ年相勤申候、

一私儀

天保十己亥年相続仕候、

嘉永六癸丑年年数相勤、近來心得方宜相聞候趣ヲ以火

消小頭格被 仰付候、

天保十己亥年迄十六ヶ年相勤、当寅五拾六歳

二罷成申候、

右之通御座候、以上、

由緒書

一私父鍛冶彦兵衛裡町貳丁目彦兵衛倅

寛政元己酉年迄御丁内江住居仕候、

同三辛亥年鍛冶平兵衛扣家相求、本人二相立候処、

御船鉄釘御用聽被 仰付候、

文化七庚午年迄二十二ヶ年相勤申候、

一私儀三崎浦善作弟

文化七庚午年相続仕候、

嘉永四辛亥年火消小頭順席被 仰付候、

文化七午年迄当寅年迄四拾五ヶ年相勤、当寅七拾歳二

罷成申候、

右之通御座候、以上、

鍛冶

嘉永七甲寅閏七月 彦兵衛

由緒書

一私父船大工利助大浦源助倅

安永四乙未年船大工権六弟子二罷在候処、年数相勤申

候二付、権六元家相続仕、本人二相立申候、

文政七甲申年迄五十ヶ年相勤申候、御願申上養子喜惣治江相続仕候、

一私儀三崎浦利兵衛倅

文政七甲申年相続仕候、

嘉永二己酉年火消小頭順席被 仰付候、

文政七甲申年分当寅年迄三十壺ヶ年相勤、当寅七拾三歳二罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 船大工

喜惣治

船大工

利 助

安政 (マ) 年父喜惣治及老年利助相続

慶応三丁卯年五月御時體柄恐察仕、銀札老貫五百目献金仕候付、御家名書下し御免被成下候、

由緒書

一私父船大工藤七藤江浦分七倅船大工権兵衛弟子二罷在安永六丁酉年分御丁内江居住仕候、

享和元辛酉年船大工新左衛門居宅相求、本人二相立申

候、

文政十丁亥年迄五十壺ヶ年相勤申候、

一私儀

文政十丁亥年相続仕候、

弘化二乙巳年火消小頭役被 仰付候、

嘉永四辛亥年御願申上退役仕候、

文政十丁亥年分当寅年迄二十八ヶ年相勤、当寅五十壺歳二罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 船大工

八十松

由緒書

一私祖父塩屋源藏御旗組與平治倅

寛政八丙辰年御丁内江罷越、船大工亀十郎借家二罷在候処、

同年二右家屋敷相求、本人二相成申候、

文政六癸未年養子源藏江相続御願申上候、

寛政八丙辰年分

文政八癸未年迄二十八ヶ年相勤申候、

一父源藏穴井浦嘉兵衛倅

文政六癸未年相続仕候、

同年二家名書下

御免被成下、丁頭格被 仰付候、

天保九戊戌年迄拾六ヶ年相勤申候、

一 兄源藏

天保九戊戌年相続仕候、

弘化元甲辰年弟長之助扣家江別宅為仕、本人ニ相立申候、

同四丁未年丁頭役被 仰付候、

天保九戊戌年

嘉永貳己酉年迄拾貳ヶ年相勤申候、

同年丁頭役退役仕、御願申上惠美須町江引越参り申候、

一 私儀

弘化元甲辰年扣家本人ハ本家江罷歸り候、

嘉永貳己酉年右扣家御願申上甥弁治郎江相譲り申候、

同四辛亥年火消小頭役被 仰付候、

弘化元甲辰年扣家相続仕候、已来嘉永六癸丑年迄拾ヶ

年相勤、同年三十四ニ而病死仕候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 塩屋

源 助

後家
い し

一 嘉永七甲寅年十月十四日塩屋重藏弟和三郎依願本人ニ相立候、

慶応二丙寅年為救窮民銀札壹貫五百目致出銀候趣ヲ以

家名書下シ御免被 仰付候夏、

由緒書

一 私父船大工和助日振島甚七倅

安永六丁酉年船大工権兵衛弟子ニ付、右内ノ扣家江別

宅仕候、

天保十己亥年迄六十三ヶ年相勤、倅鉄之助江御願申上

相続為仕候、

一 私儀

天保十己亥年相続仕、

嘉永七甲寅年ハ十六ヶ年相勤、当寅四拾九歳ニ罷成申

候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 船大工

鉄之助

由緒書

一私先祖船大工長右衛門船大工長兵衛二男

文化二乙丑年長兵衛扣家江別宅仕候、

同十癸酉年迄九ヶ年相勤申候、

一二代目 寅之助長右衛門倅

文化十癸酉年相続仕候、

天保九戌戌年分二十六ヶ年相勤申候、

一私儀船大工長兵衛二男

天保九戌戌年相続仕、当寅年迄拾七ヶ年相勤、当寅三

十七歳二罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 紀伊国屋

五兵衛

安政四年平日心得方宜趣ヲ以火消小頭被 仰付候、

由緒書

一私父庄兵衛

文化五戌辰年松山三津浜分

御当国江罷越御丁内船大工芳右衛門控家江借宅仕候、

文化拾四丁丑年迄拾ヶ年相勤申候、

一私儀 高山浦善右衛門倅

文化拾五戌寅年相続仕候、

文政拾二己丑年右芳右衛門扣家相求、本人二相立申候、

文化十五寅年分当寅迄三拾七ヶ年相勤、当寅六拾七歳

二罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 来嶋屋

庄 助

嘉永七甲寅年八月十一日年数実貞相勤候二付、火消小

頭格被 仰付候、

由緒書

一私儀吉田裡町佐野市之進倅

文政九丙戌年分御丁内江罷越、小倉屋久吾借家二罷在

候処、

天保五甲午年船大工九兵衛扣地相求、普請仕引移り本

人二相立申候、

文政九丙戌年分当寅年迄式拾九ヶ年相勤、当寅六拾七

歳二罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 佐野屋

吉 助

安政五年三月致死去、相續之者無之二付、後家りよ
当分本人ニ相立、

由緒書

一私儀塩屋源蔵三男

天保十四癸卯年堀部徳之丞扣家相求置

弘化元甲辰年源蔵内分別宅仕、本人ニ相立申候、

当寅年迄十沓ヶ年相勤、当寅三十三歳ニ罷成申候、以
上、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 塩屋

長之助

安政四年平日心得方宜趣ヲ以火消小頭被仰付候、

安政七庚申年差上銀致し候付、家名書下御免被成下候

事、

元治二乙丑年右年数火消小頭役貞実相勤候ニ付丁頭格

申付、

慶応二丙寅年十二月廿二日丁頭格出精相勤、且亦為救

窮民銀札五貫目致出銀候趣ニ付、以格別之御吟味合苗
字御赦免被 仰付候迄、

由緒書

一私伯父正木亦兵衛和泉屋栄助二男

文政三己卯年堺屋利兵衛跡家屋敷相求、御丁内本人ニ
相立申候、

天保七丙申年松丸方江出商売ニ罷在候処、延野々村百

姓ニ助精仕候ニ付御賞被成下、苗字 御免被成下候、

同八丁酉年非常之時合ニ付、御丁内極難渋之者共江助
精仕候ニ付為御賞

菱木綿式端被下置候、

同年法華津屋勘助跡家屋敷振替ニ仕候、

同十五甲辰年迄二十五ヶ年相勤、

同年ニ松丸方江罷越申候、

一私儀 紀伊国屋幸七三男

天保十五甲辰年相続仕候、

当寅年迄十沓ヶ年相勤、当寅三十歳ニ罷成申候、以上、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 和泉屋

亦十郎

安政二乙卯年 松丸村正木直吉幼少故依願継父ニ引越、
跡番代船大工捨兵衛二男栄治郎為相勤度、亦十郎名元
亦兵衛与改名致候事、

由緒書

一私儀

天保三壬辰年御丁内江罷越、船大工権兵衛扣家江借宅仕候、

弘化式乙巳年川端新地相求普請仕、本人二相立申候、

同三丙午年父傳吉本町式丁目住人二罷在候処、隱居仕、

御願申上私方江引越参り申候、

嘉永元戊申年九十才ニ罷成候ニ付、年齢御祝被成下、

御殿御内庭江罷出

御目見被 仰付、木綿老反被下置候、

天保三壬辰年今当寅年迄二十三ヶ年相勤、当寅十八才

ニ罷成申候、以上、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 米屋

傳 吉

安政七庚申年差上銀致候付御酒被下置候事、

慶応二丙寅年十二月廿二日為救窮民銀札壹貫目致出銀

候趣ニ而、火消小頭退席被 仰付候迄、

米屋

傳 吉

一二代目

〈原文記載ナシ〉

由緒書

一私先祖小倉屋平兵衛吉田御組小頭喜兵衛倅

天明三癸卯年御丁内江罷越住居仕候、

文化十四丁丑年迄三十五ヶ年相勤申候、

一二代目

與六 日振島山三郎倅

文化十四丁丑年相続仕候、

文政十二己丑年迄十三ヶ年相勤、御願申上退身仕候、

一三代目

久吾 惠美須町大兵衛倅

文政十式己丑年相続仕候、

天保十壹庚子年迄拾式ヶ年相勤、退身仕候、

一四代目

兼松 船大工善助二男

天保十壹庚子年相続仕候、

弘化式乙巳年迄六ヶ年相勤申候、

一私儀奥浦長八倅

弘化二乙巳年相続仕、当寅年迄拾ヶ年相勤、当寅四拾

九歳ニ罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 小倉屋

定兵衛

安政四巳年養子元之助江相続ニ相成、

由緒書

一 私祖父圓之丞高串村甚八倅

文化十二乙亥年、御丁内江住居仕、樽屋職仕候二付、御

船御用聽被 仰付相勤申候、

天保九戊戌年、船大工傳吾家屋敷相求、本人二相立申候、

弘化三丙午年、迄三十二ヶ年相勤、御願申上、倅卯助へ

相続為仕隱居仕候、

一二代目 卯助

弘化三丙午年相続仕、当寅年、迄九ヶ年相勤罷在候処、

当寅四月、倅卯吉江相続御願申上、死去仕候、

一私儀

嘉永七甲寅年相続仕、当寅拾貳歳ニ罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 樽屋

卯吉

由緒書

一 私先祖船大工甚右衛門此者出所調合仕候処、

旋与相分り不申候、

寛文年中、御丁内江住居仕候、

延宝六戊午年、迄相勤申候、

一二代目 船大工九左衛門弟子 久三郎 甚右衛門倅

延宝六戊午年相続仕候、

享保五庚子年、迄四十三ヶ年相勤申候、

一三代目 船大工九左衛門弟子 甚右衛門 久三郎倅

享保五庚子年相続仕候、

明和元年、申年、迄四十五ヶ年相勤申候、

一四代目 清藏吉田御船手源七倅

同年、甚右衛門跡相続之者無御座候二付、前々之弟子二

御座候間、船大工権兵衛右甚右衛門家屋敷調置弟子清

藏江別宅為致、本人二相立申候、

文化七庚午年、迄四十四ヶ年相勤申候、

一五代目 清右衛門

文化七庚午年相続仕候、

天保二辛卯年、迄貳拾二ヶ年相勤申候、

同年、

弘化四丁未年、迄番代三而相勤申候、

一私儀本町四丁目久吾倅

弘化四丁未年相続仕候、

一 嘉永三庚戌年、倅長太郎江私居宅上手表口式間相譲り

別宅為仕、本人ニ相立申候、

弘化四丁未年分当寅年迄八ヶ年相勤、当寅四十八歳ニ罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 船大工

久兵衛

一 嘉永七甲寅年十月廿九日亡父久兵衛及末期願置候通倅

幸治郎へ相続被 仰付候、

一 安政七庚申年垣岡長治郎差上銀致候付、御酒被下置候、

由緒書

一 私儀 塩屋源蔵二男

嘉永貳己酉年伯父源助本家相続仕候ニ付、御願申上、

右跡屋敷私相続仕候、当寅年迄六ヶ年相勤、当寅七才

ニ罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 塩屋

竹治郎

由緒書

一 私祖父船大工傳右衛門遊子浦傳右衛門倅

宝曆二壬申年船大工長兵衛弟子ニ罷在候ニ付、右内分

別宅仕候、

寛政九丁巳年吉田御分北灘浦大宝院倅幸藏養子ニ仕相

続御願申上候処、無間も死去仕候ニ付、傳右衛門並勤

仕候、

宝曆貳壬申年分

文化貳乙丑年迄五十四ヶ年相勤申候、

一 父卯兵衛九丁浦菊右衛門倅船大工長兵衛弟子ニ罷在、

文化貳乙丑年右内分傳右衛門養子ニ罷越同年相続仕候、

弘化四丁未年火消小頭順席被 仰付候、

文化貳乙丑年分

嘉永三庚戌年迄四十六ヶ年相勤、二男傳右衛門江相続

御願申上隠居仕候、

一 私儀

嘉永三庚戌年相続仕候、

同七甲寅年迄五ヶ年相勤、当甲寅三十九歳ニ罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 船大工

傳右衛門

由緒書

一私儀

嘉永三庚戌年船大工久兵衛内分別宅仕候、
当寅年迄五ヶ年相勤、当寅十六歳ニ罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 増田屋

長太郎

一安政七庚申年差上銀致候付、御酒被下置候、

安政五戊午年十二月 悴七藏業方熟達付本家順席被
仰付候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 借家頭取

半兵衛

新左衛門

船大工捨兵衛借家

長治郎

一安政三丙辰年三月 依願鍛冶彦兵衛内より別宅仕候、

由緒書

一私儀吉田御分北灘浦権七倅

寛政十戊午年船大工長兵衛内江弟子ニ罷越、

享和元辛酉年別宅仕、長兵衛扣家番代相勤申候、

嘉永三庚戌年鍛冶彦兵衛家屋敷表口式間通り相求、同
年迄未年迄十ヶ年之間相続仕、本人ニ相立申候、当寅
年迄五ヶ年相勤、当寅六十八歳ニ罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 船大工

浅之進

由緒書

船大工権六借家

一天保貳辛卯年浄念寺浪人宗門分 吉太郎

御丁内江罷越、当寅年迄廿五ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

船大工権六借家

一文政十式己丑年下泊浦浅右衛門内分 弥三郎

御丁内江罷越候

嘉永元戊申年借家頭取被仰付候、

同三亥戌年退役仕候、当寅年迄廿七ヶ年罷仕候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

船大工権兵衛借家

一天保七丙申年市原屋新兵衛内分 新左衛門

別宅仕、

嘉永四癸亥年借家頭取被 仰付候、

当寅年迄拾九ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

嘉永七甲寅年八月十一日借家頭取深切相勤候二付、本

家家持格被 仰付候、

安政四丁巳年十一月十一日借家頭取勤方宜趣ヲ以本家

持順席之御賞被成下候、

由緒書

塩屋竹次郎借家

一天保三壬辰年横新町

池田屋猪兵衛内分御丁内江罷越、

嘉永三庚戌年借家頭取被 仰付候、

当寅年迄廿三ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

嘉永七甲寅年八月十一日借家頭取深切相勤候二付、本

家家持格被 仰付候、

安政三丙辰年四月及老年、依願借家頭取御免被成下候、

同四年昏町熊野屋甚藏方へ家族召連養子引越参候、

当分竹次郎借家ニて商売致度旨願済、

由緒書

船大工権六借家

一父與吉

源太郎

文政四辛巳年本九島浦倉吉内分御丁内江罷越、

嘉永元戊申年借家頭取被 仰付、

同式己酉年死去仕、其跡私相続仕、当寅年迄二十三ヶ

年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

米屋傳吉借家

一 嘉永五壬子年清水村恵左衛門内の 茂 吉

御丁内江罷越、当寅年迄三ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

船大工権六借家

一 天保十己亥年船大工権兵衛内の と み

別宅仕、当寅年迄拾六ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

船大工権兵衛借家

一 弘化貳己巳年下灘浦栄太郎内の 清 吉

御丁内江罷越船大工正藏内江罷在、夫の

同年別宅仕、当寅年迄十四ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

一 私先祖船大工七兵衛宮下村善兵衛倅

宝永二乙酉年の御丁内江住居仕候、

明和三丙戌年迄六拾三ヶ年相勤申候、

一二代目 十兵衛岩濶村市郎兵衛倅

明和三丙戌年相続仕候、

安永八己亥年迄十四ヶ年相勤申候、

一三代目 善 助 十兵衛倅

安永八己亥年相続仕候、

享和四甲子年迄二十六ヶ年相勤申候、

一四代目 万 助 善助弟

享和四甲子年相続仕候、

天保四癸巳年迄三十ヶ年相勤申候、

一五代目 善兵衛 善助倅

天保四癸巳年相続仕候、

嘉永六癸丑年迄式拾壹ヶ年相勤申候、

一私儀

嘉永六癸丑年相続仕候、

同七甲寅年迄式ヶ年相勤申候、

右之通御座候、以上、

船大工

嘉永七甲寅閏七月 喜代治

安政三丙辰年四月、依願戸寫浦惣八方へ引取候事、

由緒書

一私先祖和泉屋利左衛門横新町和泉屋仁兵衛倅、老年之

後栄助与改名仕候、

安永四乙未年分御丁内江住居仕候、

天明七丁未年御丁内喜助跡家屋敷相求、本人二相立申

候、

寛政十戊午年迄二十四ヶ年相勤申候、

一二代目 国藏

寛政十戊午年相続仕候、

同年御丁内木挽武八家屋敷与讓替仕候、

文化三丙寅年迄九ヶ年相勤申候、

一三代目 林藏 岩渕村利左衛門倅

文化三丙寅年相続仕候、

弘化四丁未年迄四十三ヶ年相続仕候、

一四代目 利三郎

弘化四丁未年相続仕候、

嘉永五壬子年迄六ヶ年相勤申候、

一私儀

嘉永五壬子年相続仕候、当寅年迄三ヶ年相勤、当寅二

十壹歳二罷成申候、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅閏七月 和泉屋

喜三郎

一安政七庚申年差上銀致候二付、御酒被下置候、

由緒書

紀伊国屋長兵衛借家

一嘉永式己酉年船大工傳右衛門 卯太郎

内分別宅仕、当寅年迄六ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

船大工権兵衛借家

一天保八丁酉年和泉屋喜三郎内ノ 慶 治

悴寅之助別宅仕、

嘉永四辛亥年慶治養子二罷成候二付、同人本人二罷成、

当寅年迄十九ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

塩屋竹次郎借家

一弘化三丙酉年船大工父喜惣治 助 太 郎

内ノ別宅仕、当寅年迄九ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

安政五戊午年十二月 業方拔群熟達致候趣ヲ以本家順

席被 仰付候、

由緒書

船大工権長兵衛借家

一嘉永貳己酉年市原屋理兵衛借屋ノ 甚 太 郎

別宅仕、当寅年迄六ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

由緒書

船大工幸治郎借家

一父庄藏三崎浦之内高浦長右衛門内ノ 文 太 郎

文政六辛未年船大工権兵衛内江罷越、夫ノ別宅仕、

天保八丁酉年隠居仕、其跡私相続仕、当寅年迄三十貳

ヶ年罷在候、

右之通御座候、以上、

寅閏七月

安政五戊午年九月、家族共裡町四丁目糺屋助十郎役价

二引越参ル、

丁頭

紀伊国屋長兵衛

嘉永七甲寅閏七月

市原屋

新兵衛

船大工

権兵衛

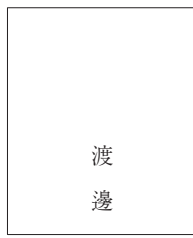
右之通船大工町中由緒書相改置候、向後銘々御賞詞代
替并借家分出入共時々此牒面江書加置候事、

寅

八月

渡邊作之進

(裏内扉)



(注記) 原文は綴じ直しの際に前後したり、行き違いになったと推測される部分があるが、翻刻に際して正合させた。